

キャリア就職センター・チャレンジセンター・ To-Collabo推進室合同FD研修会 『PROGのテスト結果から見る基礎力について』

日時： 2016年1月20日(水) 17:00～18:00

会場： 15号館4階 第一会議室

参加者： チャレンジセンター14名、
キャリア就職センター6名、
To-Collabo推進室3名

講師： 株式会社リアセック キャリア教育推進グループ 酒井陽年氏

① ジェネリックスキルの求められる背景

はじめに、経団連の調査や中教審、グローバル人材育成戦略等を引用し、学力とは異なるジェネリックスキルに対するニーズが高まっていることが解説された。

早期内定者と就職未決定者を比べるとPROGの「対人基礎力」の開きが大きいという。また、就職指導において気に掛ける学生をスクリーニングする手段としてPROGを活用する学校があることなどが紹介された。

② PROGについて

PROGについての基本的な情報として、ジェネリックスキルを「リテラシー（知識を活用して課題を解決する力）」と「コンピテンシー（経験を積むことで身についた行動特性）」に分けていることや、今回はコンピテンシーを測定していること、リテラシーは偏差値と相関があるが、コンピテンシーには関連はないことなどが説明された。

292校25万人が受験しており、主に次の3種類の活用のされ方があることが紹介された。

- 1) 主体的な学びの促進として（PDCAサイクル）
- 2) 学修成果の効果測定／学生の現状把握として（他大学との比較）
- 3) 教育IRとして

③ テスト結果・経年変化（本学の強み・課題等）（2014・2015年度比較）

本学の結果について、他大学との比較や経年変化がグラフを用いて報告された。2015年度は2658名が受験しており、概要として1、2、3回目で伸びがみられるとのこと。

また、チャレンジセンターの3年生の結果は、四年制大学3年生の平均や東海大学3年生全体、湘南校舎3年生に比べてレベルが高く、特に「對自己基礎力」が高いことが報告された。経年比較によると、チャレンジセンターの学生の結果としては、「課題発見力」に伸び悩みがみられるものの、「対人基礎力」は伸びていた。特に3年生の結果をみると、「對自己」が大きく伸びており、3年生になって活動内容や役割に変化があったことが反映しているのではないかと解説された（後輩指導など）。

④ アンケートとのクロス集計結果

相関などの統計的な面は現在分析中であり、今回はクロス集計のみが報告された。大学生生活に満足している学生は初期値が高く、その中で得点も伸びていた。一方、大学生生活を否定的にみている学生は、平均値では得点が下がっていた。

「何をしたか」より「意識して取り組んだか」が重要であり、取り組みに対して意識した学生の伸長が高いことが示された。

⑤ 質疑応答

次のような質疑応答がなされた。

Q1：どのくらい伸びれば大学の教育成果といえるのか。目安はあるのか？（放っておいても伸びるのでは）

A1：学生の初期値によって異なる（1→2と6→7は異なる）。他大学の平均でみるとほとんど伸びていない（0.2、0.3程度）ので、0.5程度上がると伸びたと言えるのでは。

Q2-1：経年変化で、1の学生が1のままだったケースがあるが、何もしていなかったということか？

A2-1：何もしていなかったわけではないが、基礎力の9種類の中では変化がなかったということ。PROGの中では行動変容がみられなかった。自己効力感を高めるようなアクションがいいのでは

Q2-2：そういう学生の就職支援はどうしたら？

A2-2：1年から2年で伸びなかった学生が3年になって急激に伸びるのは難しいかもしれない。他大学のケースで、コンピテンシーの低い学生にはそれ向けの就職を紹介していた（例：米屋の総合職）。コミュニケーションが苦手なのでその仕事は向いていたらしい。コンピテンシーの要素で見ても適する仕事を紹介するのもいいのでは。

Q3：チャレンジセンターの経年変化について、得点が伸びているが、プロジェクトをやめた学生（コンピテンシーの低い学生？）が母集団から抜けているので、精鋭が残って得点上がるということもあるのでは？

A3：それはありうる。チャレンジセンターの3年生のレベルが高いのは、辞めずに残った上澄みが平均を高めている可能性も。

所長からのコメント：上澄み説もあるが、途中から入った学生のレベルが高いという考えもできる。湘南校舎のキャリア系の授業を受けている学生は経年性がないので不利な面もあるのでは。他校舎は全体として経年で受けているので、湘南校舎は直接比較できないのでは。

Q4：経年変化のアンケートとのクロス集計において、「前回否定」から「今回否定」はレベルが下がっているというが、同じ学生とは言えないのでは。「前回・今回」「肯定・否定」の組み合わせで4パターンできるが、その学生のタイプとレベルの変化を分析することはできないのか

A4：他大学で実施しているケースもあり可能だが、今回のデータではできない。

Q5：結果を踏まえて就活に活かす上でどのようにマッチングすればいいのか？企業からの情報の中から読み取るのか、何かツールがあるのか？

A5：モデル社会人のデータについて、メーカー・非メーカーなどで比較してみると平均値ではそれほど違いはない。個社ごとに違いはあり、求めている力が違うように思われる。就活サイトにある個社ごとの先輩の声、1日の流れなどをもとにイメージさせる訓練をするようなケースも。こういう能力の人はこういう業界、というような指導は難しい。ただし、難関企業に受かる学生はコンピテンシーが高い

Q6：PROGは自己効力感を測れるのか？

A6：「自信創出力」の中に5-6問項目はある。それだけで自己効力感を測れるとは言い切れないが、これらの項目の結果が参考になるのでは

（記録：チャレンジセンター 田島）

PROGによる基礎力測定テストの結果

チャレンジセンターでは、学生プロジェクトの活動を通して、「自ら考える力」「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」の育成を行っている。昨年度より能力の育成に対して、プロジェクト活動の効果がどの程度あったかを基礎力（ジェネリックスキル）の側面から客観的に測定し、その効果を検証している。

本年度の基礎力測定は、湘南校舎のプロジェクト参加者を中心に1年から4年までの学生に対して実施した。測定は2015年12月に145名に対して行った。この中には、2014年7月と12月に実施した測定と合わせて計3回受験している2年生37名と3年生35名が含まれている。3回受験した学生が、約1年5月の活動で能力にどのような変化があったかを検証した。

検証方法としては、㈱リアセックと河合塾が共同開発したジェネリックスキル測定用のPROGテストを活用した。PROGは、「リテラシー」と「コンピテンシー」の2つの観点で測定する。「リテラシー」は、知識を基に問題解決にあたる力で、知識の活用力や学び続ける力の素養をみるものである。「コンピテンシー」は、経験から身に付いた行動特性で、どんな仕事にも移転可能な力の素養をみるものである。今回は、「コンピテンシー」についてのみ結果をまとめた。図1は、2015年度2年生の結果で、図2は3年生の結果である。

「コンピテンシー」の構成要素別に見ると、図1のように2年生において2015年のスコアは、概ね、どの要素も伸長している。2回目・3回目の受験時のスコアは、他大学2年生のスコアを、多くの要素が上回る結果となった。図2の3年生も、2年生同様、概ね、どの要素も伸長している。特に、對自己基礎力への伸長が大きいことがわかる。また、他大の3年生のスコアより本学の学生が高くなっていることが明らかになった。本学の2年生と3年生の結果を比較してみると、3年生が多くの要素で上回る結果となった。

今回の測定結果より「コンピテンシー」は、一部項目を除いて、1年5か月の活動によって伸張していることが明らかになった。比較的長いスパンでプロジェクトに関わり、様々な課題に対して、取り組んだ成果だと推測される。これらの結果は、プロジェクトの様々な活動を通して学生たちの能力が向上したことを表している。

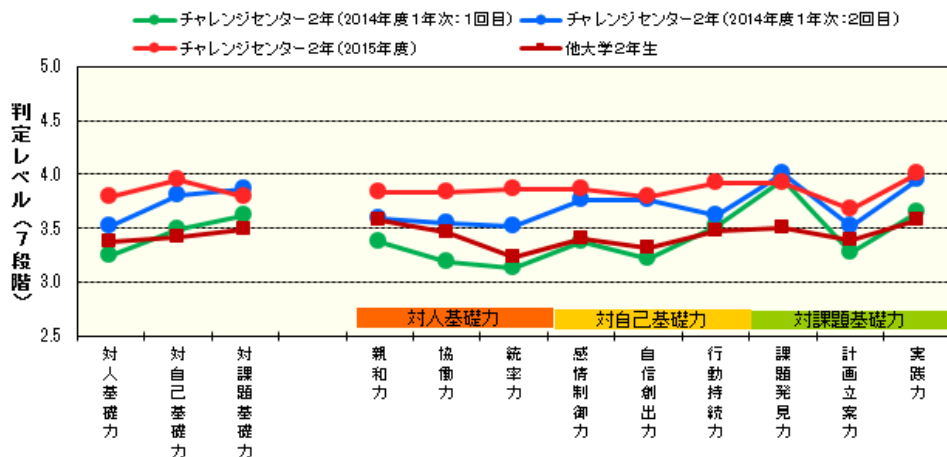


図1 2年生の要素別成長分析

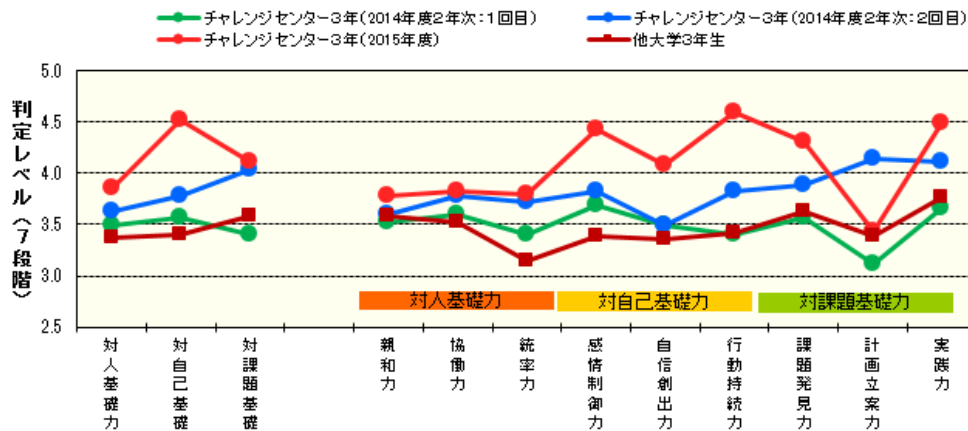


図2 3年生の要素別成長分析